

## 調査・統計

### 学童期の矯正患者をもつ家族の母親からみた歯磨き習慣について ——第1報：基礎資料の検討——

鯨井正夫

クジライ矯正歯科

Masao KUJIRAI

Kujirai Orthodontic Clinic

キーワード：歯磨き習慣，家族調査，面接聴取

抄録：矯正治療を予定している学童をもつ母親104名を対象として，母親からみた子供および家族構成員の歯磨き習慣について面接調査を行い，次のような結果を得た。

1. 親が歯を磨くにもかかわらず，歯を磨く習慣のない子供がいた（2%）。
2. 自分から進んで磨く子供は70.2%，言葉かけ等の家族の援助が必要な者29.8%であった。
3. 磨き方は，すみずみまで磨く子供39.4%，大まかに磨く者60.6%であった。
4. 父親の58.8%は，子供に歯を磨くよう声をかけている。これは，母親とほぼ同数にあたる。
5. 学童期の子供には，口腔清掃回数，口腔清掃自主態度，口腔清掃達成度が良好に定着している歯磨き習慣形成群と内容の伴わない歯磨き習慣未形成群の者がいた。前者に対しては抵抗なく矯正治療を開始できようが，後者に対しては適切な口腔衛生指導が必要である。
6. 学童期の歯磨き習慣の形成には，母親に加えて父親も関与していることが示唆された。

(Orthod. Waves 59(1) : 52~60, 2000)

### Toothbrushing habits of family members and primary school-age children scheduled to begin orthodontic treatment by mother's point of view ——Part 1 : Evaluation of basic data——

**Abstract** : One hundred four mothers of primary school-age children who were scheduled to begin orthodontic treatment were interviewed regarding the toothbrushing habits of both the children themselves and other family members. The results, based on the mothers' observations, are as follows :

1. Two percent of the children did not brush their teeth regularly, regardless of how regularly their parents brushed their teeth.
2. Of the children, 70.2% brushed their teeth voluntarily, whereas 29.8% had to be encouraged to do so by their family members.
3. Of the children, 39.4% brushed their teeth thoroughly, whereas 60.6% did not.
4. Of the fathers, 58.8%, about the same percentage as mothers, instructed their children to brush their teeth.
5. The children were divided into two groups : a) those with good toothbrushing habits based on regular brushing, brushing voluntarily, and brushing thoroughly ; b) those with poor oral hygiene habits. Orthodontic treatment could be started without hesitation for the former group, but appropriate oral hygiene instruction is necessary for the latter group.

6. The development of toothbrushing habits of those children were influenced not only by their

mothers but by their fathers as well.

(Orthod. Waves 59(1) : 52~60, 2000)

## 緒 言

近年、矯正歯科治療が盛んになるにつれ、歯磨きによる口腔清掃管理の重要性が増してきている。それは、円滑な矯正治療が、患者の口腔清掃という協力の上に成り立つからである<sup>1-5)</sup>。事実、臨床の現場では、口腔清掃が不良なために矯正治療を中断せざるを得ない症例に遭遇することもまれでない。

ところで、口腔清掃の指導の対象となる患者は、本人を囲む家族からの影響を意識的、無意識的に受けており、歯磨き習慣の形成についても家族環境が重要な役割を果たしていることは明らかである。

したがって、患者本人とその家族構成員の歯磨き行動並びにその考え方について知ることは、患者に対する口腔清掃の指導を行なうための重要な指針となるであろう。

本研究の目的は、以上のような観点から、矯正治療を必要とする学童期の子どもをもつ家族の歯磨き習慣について母親を通じて調査し、その実態を把握して口腔清掃管理の指針を得ようとするところにある。

## 調査方法

### I. 調査ならびに研究対象者

矯正治療開始予定の学童をもつ母親 104 名を対象者として面接調査を行った。学童および母親の年齢等を表 1, 2 に示す。なお、対象者の 36.0% が専業主婦で、残りの 64.0% はパートまたは常勤の職業を持っていた。また父親のいる家族は 102 家族で、母子家庭が 2 家族あった。祖父母、祖父、祖母のいずれかと同居している家庭は 44% (45 家族) であった。そして、これらの対象者には、調査に先立ち院長より趣旨を十分に説明し協力を依頼した。

### II. 面接調査の実施法

面接調査は、長年当院に勤務する 40 歳台の歯科衛生士 (主任) が個室において、直接面接聴取方式により行った。すなわち、クジライ矯正歯科で作成された歯磨き習慣調査表を用いて、1. 子供の歯磨きに関する事項 (31 項目)、2. 母親の歯磨きについての事項 (29 項目)、3. 父、祖父、祖母についての事項 (14 項目) 等の合計 74 項目について母親と面接調査した。その際、学童は同室しなかった。調査に対する回答形式は、「はい」「いいえ」で答える二項目選択法を原則とした。本報告に関係する調査項目計 17 を表 3 に示す。

表 1 学童の年齢

年 齢	男	女	計
7	2	1	3
8	6	6	12
9	11	18	29
10	17	17	34
11	9	10	19
12	5	2	7
平均 9.7 歳	50 名	54 名	104 名

表 2 母親の年齢

年 齢	人 数
30 歳～35 歳	27
36 歳～40 歳	47
41 歳～45 歳	27
46 歳～48 歳	3
平均 38.1 歳	計 104 名

## III. 基礎資料の作成法

面接調査の結果は各調査項目毎に単純集計を行い、% を算出して基礎資料を作成した。なお、% は小数第一位までを採用した。その際、必要に応じてクロス集計を追加した。なお父親の口腔衛生に対する関心と行動についてはカイ二乗 ( $\chi^2$ ) 検定を用いた。

## 結 果

### I. 子供の調査結果

#### 1. 歯磨き回数について (図 1 a, 2)

1 日の歯磨き回数については、1 回 : 11 名 (10.6%)、2 回 : 42 名 (40.5%)、3 回 : 47 名 (45.1%)、4 回 : 2 名 (1.9%) であった。また磨く習慣がない : 2 名 (1.9%) であった。なお、小学校での昼食後の歯磨き指導については、指導があると答えた人は 63.5% で、磨く習慣のない 2 名の子どもは異なる学校に属していたが、いずれも昼食後の歯磨き指導を行っていなかった (図 1 a)。

また、学校での歯磨きを除いた家庭での歯磨き回数については、1 回磨く : 24.0%、2 回磨く : 70.0%、3 回磨く : 2.0% で、磨く習慣がない : 4 名 (4%) であった。磨く習慣のない 4 名の内訳は家庭、学校のいずれでも磨かない 2 名、家庭で磨かず学校で磨く 2 名である (図 2)。

いつ歯磨きをするかについては、朝食後、昼食後、

表 3 面接調査項目

1. お子さんは一日に何回歯を磨きますか……………(1) ( 回)	それはいつですか 朝 (食前 食後) 昼 (食前 食後) 夜 (食前 食後 就寝前) (2)時々一度もみがかないことがある
2. お子さんの学校では昼食後の歯磨きを指導していますか……………(1)はい (2)いいえ	
3. お子さんは自分から進んで歯をみがきますか……………(1)はい (2)いいえ	
4. お子さんは歯を磨くとき, どのようにみがきますか……………(1)すみずみまで (2)大まかに	
5. お子さんは何分ぐらい歯をみがきますか……………(1)1分以内 (2)2分 (3)3分以上 (約 分)	
6. お子さんが歯を磨くとき, だれと一緒に磨きますか……………(1)一人で (2)父 母 おばあさん おじいさん 兄 姉 弟 妹	
7. お母さんは一日に何回歯を磨きますか……………(1) ( 回)	それはいつですか 朝 (食前 食後) 昼 (食前 食後) 夜 (食前 食後 就寝前) (2)時々一度もみがかないことがある
8. お子さんに歯を磨かせることに責任のようなものを感じて いますか……………(1)はい (2)あまり感じない (3)子ども自身の問題だと思っている	
9. お子さんに歯磨きをしたかどうか毎日チェックしています か……………(1)はい (2)ときどき (3)ほとんどしない	
10. お子さんが6歳以下のとき, 歯磨きのあと磨き直しをしま したか……………(1)はい (2)いいえ	
11. 家族全員に, 歯を磨く習慣がありますか……………(1)ある (2)ない 「ない」と答えた方に, それはどなたですか……………( )	
12. 家族の中で歯磨きに一番熱心なのはどなたですか……………(1)お父さん (2)お母さん (3)本人 (4)兄 (5)弟 (6)姉 (7)妹 (8)おじいさん (9)おばあさん (10)誰もいえない	
13. お父さんは虫歯に関心がありますか……………(1)はい (2)いいえ	
14. お父さんは歯磨きに関心がありますか……………(1)はい (2)一応ある (3)あまりない	
15. お父さんは一日に何回歯を磨きますか……………(1) ( 回)	それはいつですか 朝 (食前 食後) 昼 (食前 食後) 夜 (食前 食後 就寝前) (2)時々一度もみがかないことがある
16. お父さんはひんぱんに, お子さんに歯を磨くように声をか けますか……………(1)はい (2)いいえ	
17. お父さんは歯を磨くとき, どのように磨きますか……………(1)すみずみまで (2)大まか	

就寝前が最も多く32.6%, 次に朝食後, 就寝前が23.1%, 朝食後, 昼食後, 夕食後が10.6%, 昼食後, 就寝前が8.7%, 就寝前が5.8%の順であった(図1a).

2. 歯磨き内容について  
自分から進んで磨く: 70.2%, 言葉かけ等の家族の援助による: 29.8%であった(図3a).  
磨く時間は1分以内が圧倒的に多く68.3%, 2分が

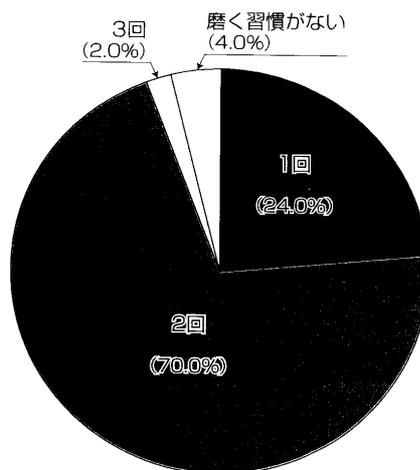
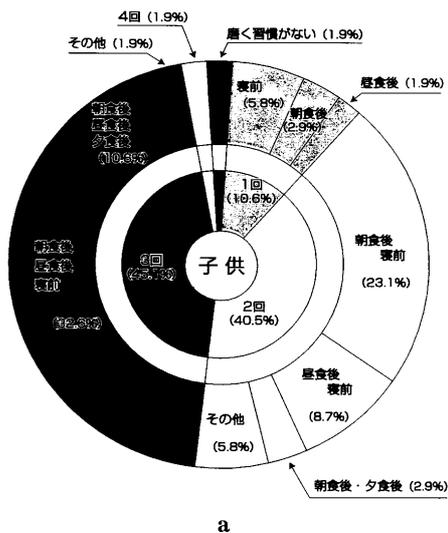


図 2 子供の家庭での歯磨き回数

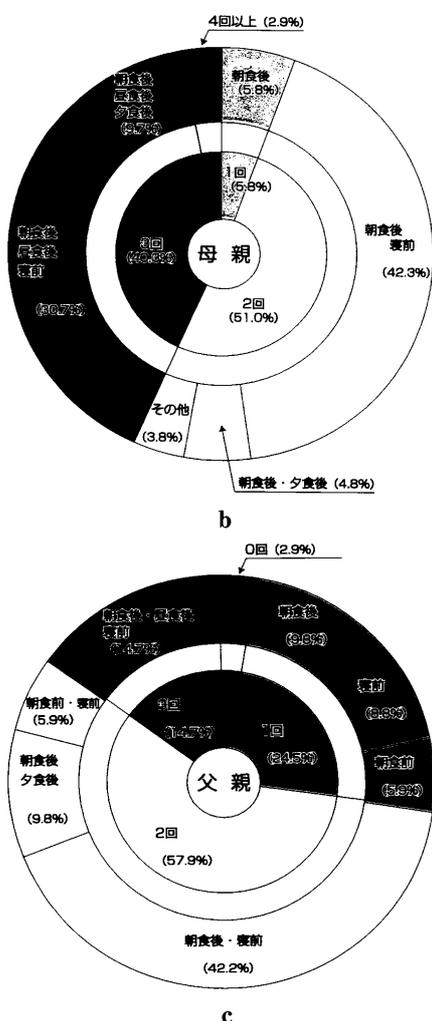


図 1 歯磨き回数と磨く時間帯

20.2%, 3分が8.7%, 5分以上2.9%であった(図3b).

磨き方については, 大まかに磨いている: 60.6%, すみずみまで磨く: 39.4%であった。(図3c)

## II. 母親の調査結果

### 1. 歯磨き回数について (図1b)

母親の1日の歯磨き回数は1回: 6名(5.8%), 2回: 53名(51.0%), 3回: 42名(40.3%), 4回以上: 3名(2.9%)であった。いつ歯を磨くかについては, 朝食後, 就寝前が最も多く42.3%, 朝食後, 昼食後, 就寝前が30.7%, 朝食後, 昼食後, 夕食後が9.7%であった。

### 2. 子供に対する考え方

子供に対して歯を磨かせることに責任を感じていると答えた母親は73.1%, あまり感じない: 7.7%, 子供の問題: 19.2%であった(図4a)。

また, 母親が毎日, 歯磨きをしたかチェックする: 56.7%, ときどきする: 14.5%, しない: 28.8%であった(図4b)。

子供が6歳以下の場合, 母親による磨き直しをした: 78.8%, しなかった: 21.2%であった(図4c)。

## III. 父親の調査結果

### 1. 歯磨き回数について (図1c)

父親の1日の歯磨き回数は, 1回: 25名(24.5%), 2回: 59名(57.9%), 3回: 15名(14.7%), 磨く習慣がない: 3名(2.9%)であった。

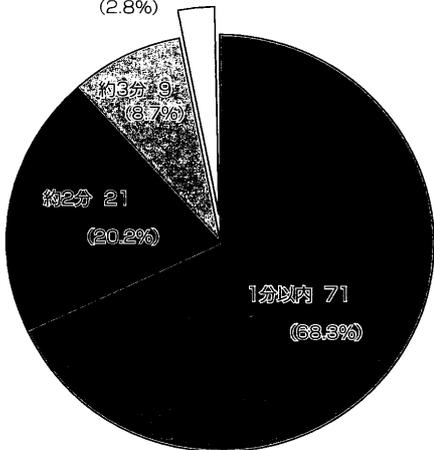
いつ歯を磨くかについては, 朝食後, 就寝前が最も多く42.2%, 朝食後, 昼食後, 就寝前が14.7%, 朝食後が9.8%, 就寝前が8.8%の順であった。

歯磨きについて, 関心がある: 58.8%, 一応ある: 18.6%, あまり関心がない: 22.6%であった(図5a)。

そこで, カイ二乗検定を行った結果では表4で示す通り, 父親の歯磨き回数は, 虫歯に関心がある場合と関心がない場合とで比較すると, 虫歯に関心がある場合は歯磨き回数が多く, 虫歯に関心がない場合には回数が少ないという結果が得られた( $P < 0.001$ )。また,



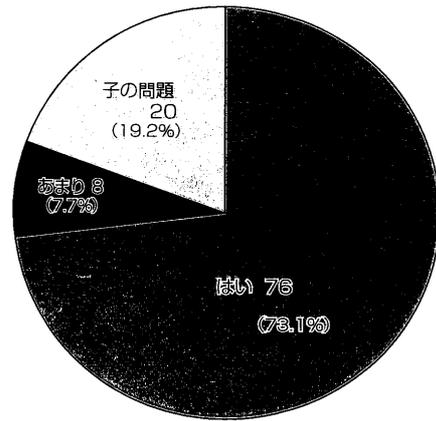
a. 進んで歯磨きするか  
5分以上 3 (2.8%)



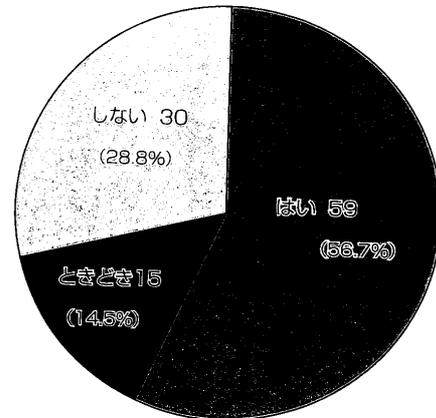
b. 歯磨き時間



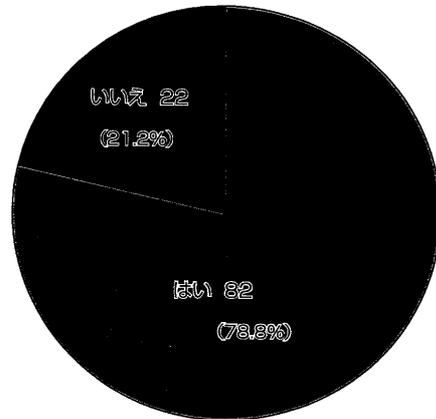
c. どのように磨くか



a. 子供の歯磨きに責任を感じるか



b. 子供に歯磨きチェックするか



c. 子供が6歳以下のとき磨き直したか

図3 子供の歯磨き内容

図4 母親の子供に対する考え方

歯磨きに関心がある場合と関心がない場合とで比較しても、歯磨きに関心がある場合は回数が多く、歯磨きに関心がない場合は回数が少ないという結果が得られた (P<0.001)。

そして、すみずみまで丁寧に磨く父親は、虫歯に関心があり、おおまかに磨く父親は、虫歯に関心がない

(P<0.001)。また歯磨きに関心についても、すみずみまで丁寧に磨く父親は歯磨きに関心があり、おおまかに磨く父親は歯磨きに関心がない (P<0.001) という結果が得られた。

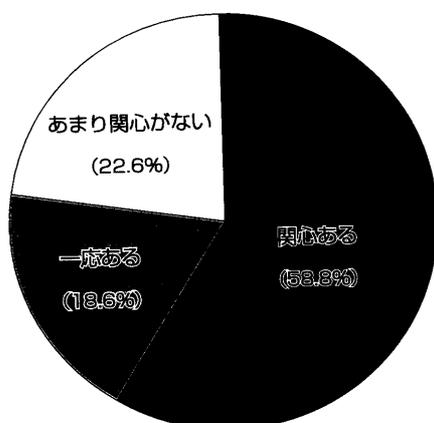
2. 子供に対する考え方

父親が子供に対して時折歯を磨くよう声をかける：

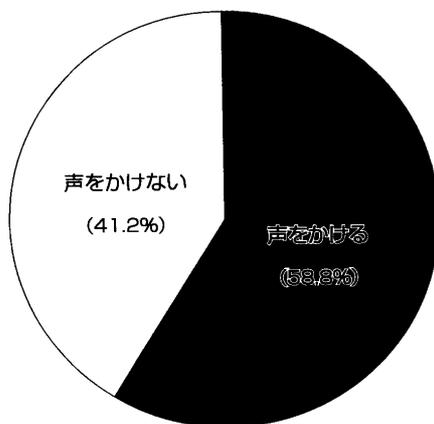
表 4 カイ二乗検定による父親の口腔衛生に対する関心と行動の関係

歯磨きに関心があるか	0.000000 ***			
子供に声をかけるか	0.000640 ***	0.002430 **		
回数	0.000018 ***	0.000002 ***	0.025983 *	
どのように磨くか	0.000528 ***	0.000079 ***	0.139226	0.732082
	虫歯に関心があるか	歯磨きに関心があるか	子供に声をかけるか	回数

\*\*\* : P&lt;0.001, \*\* : P&lt;0.01, \* : P&lt;0.05



a. 父親の歯磨きについての関心



b. 父親の子供に対する行動

図 5 父親の関心と行動

58.8%, 声をかけない: 41.2%であった(図5b)。そこで、カイ二乗検定を行ったところ、声をかける父親は虫歯に関心があり、声をかけない父親は虫歯に関心がないという結果が得られ( $P<0.01$ )、また、声をかける父親は歯磨きに関心があり、声をかけない父親は歯磨きに関心がないという結果も( $P<0.01$ )得られた(表4)。

そして、声をかける父親は磨く回数が多く、声をかけない父親は磨く回数が少ない( $P<0.05$ )という結果が得られた。

#### IV. 家族全体の調査結果について

家族全員が歯を磨く習慣あり: 92.3%, 磨かない習慣あり: 7.7%であった。(図6a)。その内訳は、父親3名、兄1名、祖父母、各2名であった。

また、家族の中で最も熱心に歯を磨く者は、母親: 36.9%, 父親: 22.3%, 学童12.6%, 姉11.7%, 祖母1.9%, 祖父と弟各1%で、誰とも言えない: 12.6%であった(図6b)。

## 考 察

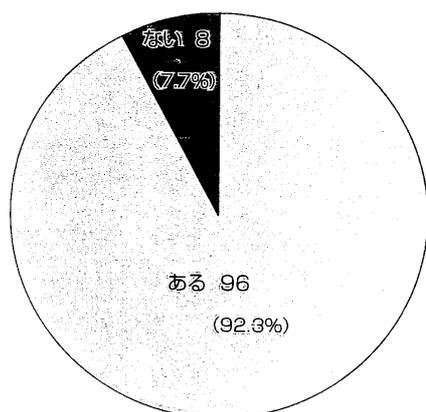
### I. 面接調査法について

本研究では母親を調査対象者とした。それは、母親が主婦として子供のことはもとより同居する家族の生活習慣に最も精通しているという理由からである。

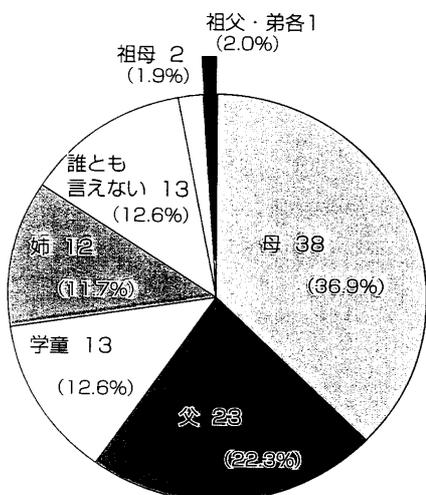
ところで、面接調査の利点は口頭で質問できることから、比較的内容を理解させやすいことや回答に添って追加質問ができることである。一方、問題点として、質問法や面接の場における雰囲気、調査員の熟練の程度、指示の履行状態などがあげられる<sup>6,7)</sup>。本研究での面接調査は、被調査者の回答内容のプライバシー保護のため個室で施行された。調査員には長年当院に勤務する40歳代の歯科衛生士(主任)が当たった。したがって、調査結果はそれなりに安定したものが得られたものと思われる。

### II. 子供の歯磨きについて

国民の歯ブラシの使用状況について、平成5年度の厚生省の報告<sup>8)</sup>によれば、5~9歳では毎日磨く: 89.83%, ときどき磨く: 9.44%, まったく磨かない: 0.74%であったという。また10~14歳では、毎日磨



a. 家族全員に歯磨き習慣あるか



b. 家族の中で歯磨き熱心なのは誰

図6 家族全員の歯磨き習慣

く：92.4%，ときどき磨く：7.24%，磨かないは0.28%であった。したがって、本調査での結果は、厚生省のデータと必ずしも一致するものではなかった。このことは、調査規模にもよろうが本研究では厚生省のデータと比較するとより良好な歯ブラシ使用状況となっている。これは、矯正治療を予定している家庭ということでより口腔衛生への理解が高いためと考えられる。

### 1. 習慣形成について

山下<sup>9)</sup>は、習慣形成の条件を幼児期の限定された時期における、型つけ、例外のない練習、気持ち、としている。また、歯磨き習慣の習得時期について、2歳頃から始めて5歳位までに自立させるべきとしている。

五十嵐<sup>10)</sup>は、小児の歯磨き習慣形成経過は、7歳頃までに開始期、遊戯期、移行期、定着期、習慣期の5期の区分があるとしている。そして、歯磨きの躰をしていく移行期に、これまで通り母親が主体として歯を磨く理想に近いグループと、歯磨き主体が小児に移り母親が傍観の立場をとるグループがあることを報告して

いる。また、小児は開始期、移行期、習慣期に歯磨き回避行動をとる場合があることをあげている。つまり、彼等の報告を総括すると、歯磨きが習慣化されるまでには、親子共に長期間にわたり持続的な努力が必要であることが知られる。

本研究では、1日1回：10.6%，2回：40.5%，3回：45.1%であった。毎食後歯を磨くという原則からすれば、1日3回磨くは生活習慣として清潔意識の高いグループと考えられる。したがってこのグループは、矯正治療を始める際、抵抗なく治療展開できる学童といえるであろう。

### 2. 習慣未形成について

本研究では、1日に1度も歯を磨かない者が2名いた。この2名は、8歳の女子と9歳の男子である。そこで、この子供の両親を調べてみた。第1例では、母親は朝食後と就寝前の2回、父親は磨く習慣がなかった。この家庭では父方の祖母が同居していたが、この祖母は朝食後と夕食後の2回を習慣としていた。

第2例では、母親と父親は共に朝食後1回を磨く習慣としていた。一般的には、両親の習慣行動は学習、模倣、感化、薫化を通して子供に習得されていくと考えられている<sup>11)</sup>。しかし、この2つの例から歯を磨くという習慣は、必ずしもうまく両親から子供へ伝達されるものではないようである。このようなグループの者は、親の習慣を習得できなかったいわば『歯磨き習慣未形成群』であると考えられる。学童期での矯正治療を行う場合、患者の中にはこのような問題をもつ者が混在しており、その者に適切な口腔衛生指導をすること無く治療を開始することは慎むべきである。

ところで、歯磨き開始の切っ掛けについては、行動を起こすとき言葉かけの援助を必要とするが29.8%いた。彼らは、習慣化が充分でないと考えられる。山下<sup>12)</sup>は、歯磨き習慣の形成で自立時期は7~8歳頃としている。

本研究では、1人で磨く：76.9%いた。この状況は、学童期の子供が親と歯磨き行動を共にする機会があまりないことを示している。鈴木<sup>13)</sup>によれば、6歳では64.8%が1人で磨くと報告しているのほぼ妥当であろう。

歯磨きの内容については、1分以内の者が68.3%いることや大まかに磨いている者が60.6%いることから、母親からみて少なくとも半数を越える者が十分な磨き方をしていないことが窺える。小笠原<sup>14)</sup>は、5歳で歯列のすべての部位を磨くことのできる態勢が備わるとしている。しかし、全体的に磨ける者は実際には33.4% (6歳時) にすぎず、6歳でも間接的介助が必要と述べている。

以上のことから、学童期の子供で歯磨き習慣に内容の伴わない者、すなわち家族から声をかけられ、一人

表 5 子供に声をかける父親と父親の口腔清掃回数との関係 (Q 16, Q 15)

	父親の歯磨き		計
	1回	2回	
子供に声をかける	11	49	60
子供に声をかけない	16	26	42
計	27	75	102名

で、短時間に、大まかに磨く者は、前述の磨く習慣のない者より程度はよいもののやはり矯正治療をただちに進めるには難があるといえよう。いいかえれば、この者も『歯磨き習慣未形成群』の範疇に含まれる学童で、何らかの間接的介助をした方が良く思われる。

歯磨き習慣形成群、未形成群については、口腔清掃習慣が得られている学童でも清掃状況が必ずしも良好でない場合もあることを否定できない。今後、この点についてブランクコントロールレコードなどを用いて検討する必要がある。

### III. 母親の歯磨きについて

本研究では、母親の歯磨き回数は1回:6名(5.8%),2回:53名(51.0%),3回が42名(40.3%)であった。子供の歯磨き回数と比較して、3回磨く者が少ない理由は、子供の場合には学校で磨く者が60%程いるためと思われる。

子供に対しては73.1%の母親は、子供に歯を磨かせることに責任を感じている。そして、56.7%の母親が実際に声を掛けている。また、子供が6歳以下の時に、磨き直しをした者が78.8%いた。この状況は、半数を越える母親が子供の歯と歯磨きに関心を寄せ、子供の年齢に応じて習慣を定着させる方向に行動をしていると考えてよいであろう。

### IV. 父親の歯磨きについて

本研究では、父親の歯磨き回数は1回:25名(24.5%),2回以上:74名(72.6%),磨く習慣がない:3名(2.9%)である。母親の歯磨き回数と比較して、父親の場合1回以下の者が比較的多い(母親5.8%,父親26.4%)ことが特徴である。一方、歯磨きについての関心は、77.4%の父親が示し、約23%の父親は興味を示さない。

父親の口腔衛生への関心と行動についてカイ二乗検定を行った結果では、父親の場合には虫歯と歯磨きについての関心度が、歯磨き回数と丁寧さに大きな影響を与えていることが分かる。しかし、回数の多い者と丁寧に磨くことを調べてみると $p=0.732$ なので両者には有意差がない。

ところで、本研究では、子供に対しては58.8%の父親が歯を磨くよう声をかけている。さらに、この声をかける父親は虫歯に関心が高くかつ歯磨きに関心があり、そして磨く回数が多い人( $p<0.05$ )である傾向がみられた(表5)。

虫歯や歯磨きについて正しく認識し、実際に習慣行動をしている父親が、自分の子供に声をかけるという行動を可能にするのであろう。このことは、母親の場合と同様に、ほぼ同数の父親が子供の歯磨き習慣に関心を持ち、これを定着させる方向に行動していると考えてよいであろう。

### V. 家族全体の調査結果について

内閣広報室の調査<sup>15)</sup>によれば、家庭でのしつけ教育は、84%の家庭で母親が担当している。したがって、母親が歯磨きの指導について影響力が強く、実際に歯磨きに関して熱心であることが予想できた。ところが、本研究では家族の中で最も熱心に磨く者が母親である場合は36.9%で、必ずしも高い数値ではなかった。以下、父親22.3%,学童12.6%,姉11.7%,祖母1.9%,誰とも言えないが11.7%であった。このことは、歯磨き熱心度については予想に反して母親がいつも家族の主導的立場にいるのではなく、少なくとも半数を越える家庭で母親以外の構成員がその座にいることを示している。

### VI. 歯磨き習慣の総括

以上のように母親からみた学童と家族の歯磨き習慣について検討してきたが、家族の中で学童が培う習慣とは、その個体の行動様式と深い関係があることがわかる。この考えに基づけば、習慣という漠然とした概念はより具体性のある内容に変換される。例えば歯磨き習慣行動には、歯磨きを始める時間、磨く場所、歯磨剤を使うか、歯磨きに要する時間、ブラシを通じての力の入れ具合などがある。

本研究では、これらの項目の中から特に一日の口腔清掃回数と、自分から進んで磨く口腔清掃自主態度と清掃の成果を示す口腔清掃達成度に着目をした。それは、この3つの尺度が前述のように習慣行動のすべてを網羅するものではないが、この尺度を明確にすることで学童の歯磨き習慣の概容を把握できると考えたからである。その前提に立って、3つの尺度が良好に定着した者を「歯磨き習慣形成群」、内容の伴わない者を「歯磨き習慣未形成群」として分類した。矯正治療を必要とする学童に対しては、これを踏まえて対処すべきであろう。そのため今後、子供の歯磨き習慣を把握する3つの尺度すなわち清掃回数、自主態度、清掃達成度の形成について両親も含めた家族構成員間の相互関係をさらに検討してより精細な情報を得る必要がある。

## 文 献

- 1) Zachrisson, B. U. and Zachrisson, S.: Caries incidence and oral hygiene during orthodontic treatment, Scand J Dent Res 79: 394-401, 1971.
- 2) Zachrisson, B. U.: Oral hygiene for orthodontic patients: current concepts and practical advice, Am J Orthod Dentofacial Orthop 66: 487-97, 1974.
- 3) Gold, S. L.: Plaque-control motivation in orthodontic practice, Am J Orthod Dento-facial Orthop 68: 8-14, 1975.
- 4) Clark, J. R.: Oral hygiene in the orthodontic practice: motivation responsibilities and concepts, Am J Orthod Dentofacial Orthop 69: 72-82, 1976.
- 5) Alexander, C. M., Jacobs, J. D. and Turpin, D. L.: Disease control in an orthodontic practice, Am J Orthod Dentofacial Orthop 71: 79-93: 1977.
- 6) 西原重喜: 面接調査の諸問題, 統計数理研究所彙報 3: 53-84, 1955. 4: 1-7, 1956.
- 7) 鈴木達三: 面接調査における回答誤差, 統計数理研究所彙報 12: 149-159, 1964.
- 8) 厚生省健康政策局歯科衛生課編: 平成5年歯科疾患実態調査報告, 第1版, 東京, 1995, 財団法人口腔保健協会, 173-174.
- 9) 山下俊郎: 幼児心理学, 第2版, 東京, 1989, 朝倉書店, 310-348.
- 10) 五十嵐康夫: 小児の歯みがき習慣形成経過についての野外科学的研究, 口腔衛生会誌 27: 288-295, 1978.
- 11) 望月 嵩: 家族関係論, 東京, 1991, 放送大学教育振興会, 48-57.
- 12) 山下 浩: 小児歯科学(各論), 第1版, 東京, 1980, 医歯薬出版, 768-780.
- 13) 鈴木善子: 小児の歯磨き習慣の形成過程に関する研究 第1編 開始時期ならびに年齢別状況, 愛院大歯誌 28: 639-661, 1990.
- 14) 小笠原正: 発達障害児のブラッシング行動におけるレディネスに関する研究 第1編 健常児の認知行動, 障害者歯科 10: 1-20, 1989.
- 15) 内閣総理大臣官房広報室: 家庭教育に関する世論調査, 東京, 1990, 18-19.

---

連絡先: 鯨井正夫 1999年5月14日受付

クジライ矯正歯科

〒360-0037 熊谷市筑波1-27 サンハイツ大和2階